グラスゴー教会総会と第一次主教戦争の地方史

富　田　理　恵

1　はじめに

本論は「祈禱書の反乱と国民契約の地方史」『東海学院紀要』第５号（2011）pp.223-237. の続編である。スコットランドでは、1637 年７月 23 日より祈禱書に対する反対運動が公然と行われるようになり、反対派の結束と祈禱書反対の意思表明の目的で 1638 年２月末に国民契約が採択された。本論は、1638 年７月を起点とする。その６月までに国民契約を奉ずる契約派は、結束を固めていた。同月ロンドン宮廷で国王に仕えてきたスコットランド貴族ハミルトン侯が、契約派弾圧の目的で国王代理としてスコットランドに到来した。６月６日にハミルトンはエディンバラ郊外のダルキースで、契約派を逮捕せよという国王の意図を枢密院の布告として出そうとしていた。しかし主教のいない枢密院はすでに契約支持の立場となっていて、これができなかった。ところがハミルトンが宮廷に戻ろうとエディンバラを出立するや否や、王からの手紙が届いて、新たな展開となった。王からの手紙は教会総会と議会の開催を認めていた。これを受けハミルトンはエディンバラに戻って７月４日、王からの指示に基づいた布告を出そうと枢密院に諮った。賛同するメンバーもいたが、ウォリストンのジョンストンがハミルトンの案を精査すると約束があいまいとわかり、彼が説得してメンバーを賛同させないようにしたので、結局枢密院の布告にはならなかった。教会総会開催の件は再びハミルトンがエディンバラに来るまで延期となった。

1638 年７月からは教会総会開催を前提に、契約派は国王側と対立しながら教会総会の準備を進めていく。契約派は、やがて国王と軍事衝突するのを覚悟しているがごとく、体制変革を狙う総会準備とともに、軍備を増強した。1638 年 11 月開催の教会総会では、国王代理のハミルトンが解散を命じるが契約派は続行するなど、王と契約派の対立が決定的になった。1639 年の３月より小競り合いから始まった第一次主教戦争は、５月から６月にかけて国境線を挟んで国王チャールズと契約派が対峙するに至るが、第一次主教戦争の停戦条約、ベリックの和平条約が６月 18 日に成立し、軍を解散し契約派は王から「スコットランドの法と宗教の保持」するとの言質をとった。そうした政治的推移の中で、地方で何が起きていたのかを明らかにしていく。

2　グラスゴー教会総会開催へ

各地から代表の参集と運動

各地の市参事会とプレスビテリは 1638 年７月下旬に照準を合わせて、代表をエディンバラに送った。バーンタイランド市参事会は７月 17 日に代表派遣を [(1)]、カーコーディプレスビテリは７月 19 日に議長と一牧師を「翌週」にエディンバラに派遣することを CH2/224/1/238、７月 25 日にはスターリングプレスビテリが代表派遣を Stirling Council Archive Service, CH2/722/5/298-299、決定した。

ハミルトンが再びスコットランドに到来したのは、８月半ばでスコットランドを出立したのは 25 日であった。王は教会総会を招集させる指令を出していた。ハミルトンが契約派に認めるよう求めていたのは、次の諸点である。第一に、契約派によって解任されたり職務停止となったりしている牧師やプレスビテリの議長を復帰させること、すべてのプレスビテリの議長が総会のメンバーであるべきこと、総会への代表選出に平信徒は参加しないこと、契約派は彼らの集会を解散させること、かつ契約に署名するよう人々に圧力をかけないことであった。契約派の委員会は返答を 17 日に起草した。その返答によれば、「ハミルトンの要求のほとんどは教会の事柄なので、総会自体が決定する。すべてのプレスビテリの議長が総会のメンバーになることには、今まで反論がなかった。いっぽう総会への代表決定の選挙においては、教会の規則では長老は一票持っていた」ということであった。この返答はテーブルズ（契約派の執行機関）に提出された時点においては、牧師たちが「長老がプレスビテリから代表を選ぶ選挙に参加する」との主張に対し、強硬に反対した。プレスビテリに長老が参加するのは、従来の慣例にない、新機軸であったからである。しかし、平信徒の契約派が結束して主張したので、牧師たちは譲歩した。すなわち契約派の委員会の返答が、ハミルトンへの返答となった。彼はその返答を受けて、要求を二つに限定した。平信徒はプレスビテリからの代表選出に関与しない

こと、議会法で成立したことについては、議会に請願する以外、手を触れないことであった。したがってパースの五箇条も触れてはいけないと、ハミルトンは要求したことになる。契約派はこれも拒否した。そこでハミルトンは、王に相談するため時間が必要といい、契約派もハミルトンが戻ってくる9月20日までは、総会への代表選挙を実施しないと約束した[(2)]。

上記の交渉の契約派側の意志決定のプロセスに、自治都市やプレスビテリは代表を送り込んでいた。8月8日にパース市参事会が二名の代表を派遣し Perth and Kinross Council Archive, B59/16/2/135-136A、8月9日にカーコーディプレスビテリが2名の牧師の代表派遣を決定している CH2/224/1/240。クーロスキルク・セッション記録によると、「テーブルズのセッションから手紙が来た」。内容は「エディンバラに代表を送るように」ということであり、それに応えて8月12日の同セッションは、平信徒6名を指名した。このなかには、教会の長老ではない者もいた CH2/77/1/55。8月13日のバーンタイランド市参事会記録は、同参事会はエディンバラの助役から手紙を受理し「ハミルトンの答えを受け」「都市のすべての代表（ye haill commission of burrowis）」に参加させるため」三名の代表を選んだ B9/12/7/38。パースプレスビテリにおいては8月15日と22日の聖書釈義はなかった。その理由について「牧師たちの会合がエディンバラであったから」と同プレスビテリ記録にある CH2/299/1/371。

スターリング自治都市総会は反契約派締め出しを決定

バーンタイランド市参事会記録は、契約を支持する自治都市の全体会と、従来の自治都市総会（ye Generall Conventione of Burrow）とを明確に区別している。8月7日に始まるスターリングにおける自治都市総会のため、都市バーンタイランドは、7月17日に代表を決定し備えた B9/12/7/33-34。この代表の報告によれば、この自治都市総会は、どの都市も、契約を署名しないものを、定例のそして臨時の自治都市総会に送ってはならないし、市当局（Magistracie）にも参事会員にも選んではならない、罰金は100ポンドである、と定めた B9/12/7/38。契約派は国内の掌握に努め、統制を取っていこうとしたことがうかがえる。

軍備の開始

契約派は、着実に戦争準備を整えていった。1638年7月17日のバーンタイランド市参事会記録をみてみよう。同市参事会には、17日以前にウィムズ伯とシンクレア卿から手紙がきて、7月20日にクーパーにおいて「貴族と代表者たち（Commissionaris）」が会合を持つこと、バーンタイランド市内にどのような武器があるのか、訪問し点検する予定であることが述べられていた。この手紙に対応して17日の市参事会は、集会に出席する二名の代表を選び、その二名が市内を巡って武器と人数（徴兵可能な兵士の数と推定される）を数え記録につけるよう命じた B9/12/7/33-34。同じ日、都市と住民が使用するための火薬を入手するため、市参事会が借金することを決定している B9/12/7/33-34。軍備は地元の貴族のイニシアティヴにより、地域の代表が集まって討議することから始まった。D・スティヴンスンによれば、7月下旬から8月上旬にかけての州を単位とし貴族が中心となった軍備の着手について、その発信源はエディンバラからの指令によるのだった *Revolution*, p.101。

7月29日の同市参事会記録には、20日のクーパーでの会合の結果が記されている。まずこの会合を「自由についての会合（ye meitting wt ye Nobilitie and vyr commissionaris at Coupar upon frydom）」と位置付けている点が注目される。貴族が命令したことは、ファイフの都市の軍事訓練は翌週水曜日の25日からカーコーディにて三日連続で行うこと、オクタールール教区の3名が、カーコーディプレスビテリの地域における兵役訓練の責任者（dreill master）となることであった。都市バーンタイランドも2名の兵役訓練の責任者を出すことが求められたので、市参事会はその2名を決定した B9/12/7/35。

8月7日のバーンタイランド市参事会は、マスケット銃を搭載したジェームズ・アーノットの船を捕捉しその銃を買い取るため、売買契約を結ぶことを決定した B9/12/7/37。軍備のためにまず兵器を確保しようとしたといえよう。

8月13日のバーンタイランド市参事会記録によれば、貴族たちは毎日軍事訓練をすること、そのための指揮命令の役職を決定することを求めており B9/12/7/38、これに従って8月28日の市参事会は、毎日軍事訓練を行うよう命令を下した B9/12/7/38-39。エディンバラからの指令を受けて、ファイフでは貴族が指導する形で域内の軍備を整え、都市もそれに従っていたことがうかがえる。

バーンタイランドと牧師　助手招聘の試み

バーンタイランドの教区教会に異変が起きていた。牧師ジョン・マイケルスンは国民契約に署名しなかった。その牧師を教区民は忌避して、教会はもぬけのからとなっていたのである。その証拠に、7月10日の参事会記録に「人々はマイケルスンに耳を傾けようとはせず、ほかの教会に行ってしまった」B9/12/7/32-33 とある。事態を収拾しようとしたのは、バーンタイランド市参事

会であった。ここでは7月10日からカーコーディプレスビテリの教区巡察の行われた9月6日まで、市参事会がこの異例の事態に対応する動きを追う。

教区民の教会忌避に対し、市参事会の立てた対策は、マイケルスンの存命中、助手として働く第二牧師を招く、ということであったB9/12/7/32-33。前述したように助手としての第二牧師招聘という方式は、オクターディラン教区において用いられている。そこでは助手として第二牧師となった息子が38年5月以降実質的に牧師として活躍し、父は一線を去ったCH2/224/1/234。この方式は、新旧牧師の間に信頼関係がある場合、両者が共に生活の保障を得ながら、任務を委譲していくしくみといえよう。

バーンタイランド市参事会の提案もオクターディラン教区の例を参考にしたものと思われる。ただし上記の方式が成立するためには、マイケルスンの承認が必要であったので市参事会は彼と交渉した。しかし給与を分与する参事会側の提案をマイケルスンは拒否し、代わりに「貸与してもよい」と申し出た。これは長期的に見れば彼が失うものはなく利子を得るということになる。これに市参事会側は条件を付けた。その条件とは、彼の教義について沈黙すること、かつてのように人々を支配しないこと、テーブルに座る他の牧師が司式する古いやり方の聖餐式を受け入れることであったB9/12/7/32-33。最後の点は、パースの五箇条の最大の論点である、聖餐受領の際にひざまずくことを否定することであった。市参事会にとって、パースの五箇条も受け入れ難い事柄と認識されていたことがわかる。

市参事会は第二牧師招聘の財源確保の努力を進めた。徴兵可能人数と武器の保持について、市内を巡回する調査の際、第二牧師の給与のためいくら献金できるかも調べることにしたB9/12/7/33-34。

市参事会と牧師との応答は続いた。7月19日の参事会記録によるとマイケルスンは、「聖餐式を古いやり方でやるつもりはないし、ほかの牧師にそれをさせるつもりもない、また貴族たちはハミルトン侯に、彼が陛下のもとから帰ってくるまでは宗教の改変はしないと約束している、契約にも署名しない」と述べた。これを受けて前述した7月20日からのクーパーでの会合で、マイケルスンのいう貴族についての話が事実であるか否か、市参事会からの代表がロシス伯に確かめることにしたB9/12/7/34。その結果、7月29日の市参事会はマイケルスンが事実を語っていないと判断した。これを直接マイケルスンにつきつけ、長い論議の後カーコーディプレスビテリの他の牧師がテーブルに座る聖餐式を行うことを認めさせた。いっぽう市参事会は第二牧師のため自発的に献金する者を募り調査したが、現れなかったので、強制的にその費用を徴収するしかないと決断したB9/12/7/35。

7月30日の市参事会は、第二牧師を招聘する決意を新たにした。その理由は「真の宗教、神の言葉を聞くこと、聖礼典の真の執行が形を保っていないから」であるが、さらにここで新たに述べられているのは、「人々による古くからの恒常的なチャリティがすべて頓挫していること」であった。第二牧師を招くためにすべての参事会員と長老も出席した中で市参事会は次のように決定した。招聘の任を担うのは、助役のジョージ・ガーディンと2人の参事会員で、そのための彼らの行動は合法的でその十分な効力をもつ、プレスビテリの審査を経てバーンタイランドの牧師となると想定されたウィリアム・リヴィングストンに会って、条件などを調整することであったB9/12/7/36。数人の参事会員が、牧師招聘に動くのは異例であるため、参事会は長老を召集し、決定の合法性を強調した。

担当者の行動は早い。まず8月2日カーコーディプレスビテリに行き、聖餐式の司式をする牧師派遣を求めた。プレスビテリはこれに応じた。さらに担当者は現在の牧師が「高齢で病弱」という理由でウィリアム・リヴィングストンの審査を願い出た。これに対するプレスビテリの応答は、話を進めるには、都市と教区の署名付きの書状が必要、エディンバラからの助言も必要とのことであったCH2/224/1/238。市参事会からの代表は第二牧師を持とうとする真の理由、すなわち教区民のボイコットを表に出さなかった。

これを受けて、8月7日のバーンタイランド市参事会は3名を代表に指名し、嘆願書をもってエディンバラに派遣することを決定した。またマイケルスンには都市が第二牧師を招聘する予定であることを伝えたB9/12/7/37。一方8月9日のプレスビテリは、市参事会の代表による嘆願書を正式に受け付けたCH2/224/1/240。

8月30日付のカーコーディプレスビテリ記録CH2/224/1/241、バーンタイランド市参事会記録B9/12/7/39、9月2日付のバーンタイランドのキルク・セッション記録のいずれCH2/523/1/305も、9月6日木曜日にバーンタイランド教区教会にカーコーディプレスビテリの巡察があることを記している。プレスビテリ記録は、プレスビテリが巡察することによって解決を図るという提案が、実は「エディンバラの会合の牧師たちがふさわしいと考えた」ことを明らかにしている。一方、キルク・セッション記録は巡察の目的を「牧師が契

約に反対するように扇動している、と人々が牧師を非難している点について、また自分たちの教会から出て行ってしまった人々を戻すための第二牧師についての見通しについて」と述べている。また9月5日の市参事会は、マイケルスンの「高齢、悪意のある誤り、病弱」についてプレスビテリに訴えるべきという結論に達しているB9/12/7/40。高齢と病弱については言及済みなので、契約に反対していることを指すと考えられる「悪意のある誤り」を、今回明言することを決めた。

9月6日の巡察では、バーンタイランド市参事会が望んだ第二牧師着任の方向には進まなかった。ただし巡察を伝える二つの記録の重点が異なる。セッション記録によると、マイケルスンは「このプレスビテリが自分を検閲する合法的な判断者ではない」と述べ、さらに会合の不法性と第二牧師拒否を述べたCH2/523/1/305。当日のプレスビテリ記録は、候補者リヴィングストンの審査合格と、マイケルスンの第二牧師拒否を伝え、さらに郊外地域の教区地主が都市のまとめた条件に乗れないと表明し「かなり大きな都市なので、十分に備えなければならない」との発言を残したCH2/224/1/242。9月13日のプレスビテリ記録は、市参事会からの代表はリヴィングストンの着任を求めたもののジェントルマンの教区地主が満足せず候補者の経験不足を挙げたため、着任不可の決定となったと記しているCH2/224/1/243。教会に人を戻すためには、プレスビテリの牧師が説教に来ることを決めたCH2/224/1/243, CH2/523/1/305。主教制支持の観点にたてば、プレスビテリに牧師を退職させる権限がないというマイケルスンの主張に理がある。それが背景にあって、市参事会は第二牧師採用の表向きの理由を高齢と病弱の牧師を助けるとしたのである。しかしこのもくろみは、マイケルスンの反対姿勢で崩れた。教会総会開会前の状況の中で、プレスビテリの権限は未定でプレスビテリはその弱点を突かれた。また教区地主たちも賛成しなかった。市参事会が独力で対策を立てようと努力し失敗した構図にみえる。

各地における教会総会への代表選任

9月に入ると、教会総会の準備が始まる。パースプレスビテリ記録によると、その動きはエディンバラのテーブルズから来た。まずこの記録から見てみよう。

9月5日のパースプレスビテリ記録によれば、5日以前に同プレスビテリあてにテーブルズから手紙が来ていた。内容は「総会の準備と代表の選任の指示と情報、さらに治会長老と総会への代表についての考慮」であった。さらに同プレスビテリが決定したことには、23日日曜日に各セッションがプレスビテリへの代表を指名し、さらに26日に指名された者たちがプレスビテリに集い教会総会への代表を選ぶことであったCH2/299/1/371。6日のカーコーディプレスビテリもエディンバラからの書類を配布しているCH2/224/1/242。カーコーディキルク・セッションは、プレスビテリに行くべき長老として9月11日に郊外地域から1名、都市部から1名決定しているCH2/636/34/37。9月13日におけるカーコーディプレスビテリの決定は、こうであった。13日以前に開かれたクーパーでの会合で治会長老がプレスビテリに参加することになり、そして24日のプレスビテリで教会総会への代表を決める。出席予定の長老として契約派の有力貴族ロシス伯、ウィムズ伯を含む11名列挙したCH2/224/1/243。20日のプレスビテリでは長老が出席し始め、教会総会出席予定者を決めるのに事前に運動するのはしないと誓約しているCH2/224/1/244。一方、ラナークプレスビテリでは、9月20日に教区代表としてプレスビテリに派遣される長老のリストが掲載されている。前述したように同プレスビテリ内には契約を支持しない3人の牧師が存在した。これらの牧師の教区は、長老を派遣してくることもなかったCH2/234/1/126。

一方ハミルトンが20日にスコットランドに到来する予定になっていたので、9月中旬にはそれに合わせてエディンバラに各地の市参事会が代表派遣を決定している。11日に都市バーンタイランドB9/12/7/40、19日に都市モントローズが決定したAngus Archive, M1/1/171。

ハミルトンがスコットランドに到来し、枢密院は9月22日に教会総会の開催を決定した[(3)]。上述したように、すでにテーブルズから指示が来ていて、各セッションではプレスビテリの出席予定長老を選ぶなど下準備を進めていた。

カーコーディプレスビテリには各セッションからの牧師や長老が集って、9月24日に選出を行った。ロシス伯、ウィムズ伯、デュリのレルドは欠席したが彼らの意図は教区の牧師を通じて伝えられた。牧師として代表に選ばれたのは3名で、カーコーディ教区のロバート・ダグラス、ケノウェイ教区のフレデリック・カーマイケル、スクーニー教区のロバート・クランストンであった。三人とも1637年10月の段階から祈祷書反対請願に関わっている。さらに3人の牧師が補助出席者（assessors）と決まった。同じく反対請願をしていた二名の牧師、レズリ教区のジョン・スミスとダイサート教区のマンゴー・ローと反祈禱書の自著が焚書されたウィムズ教区のジョージ・ギレスピであった。牧師以外で補助出席者となっているのは、ロシス伯、デュリのレルド、ボギーのレルド、ハリヤードのレルドの4名であるCH2/224/1/245。10月

11日にはさらに長老のための補助出席者（assessor）として、ハリヤードのレルドほか2名のレルド、ジェイムズ・ピトケーンが指名されたCH2/224/1/247。

スターリングプレスビテリに属するクロックマナンキルク・セッションは、9月23日「混乱の時代、罪を抑え良き秩序のため」として、教会総会代表を選ぶスターリングプレスビテリへの教区代表の長老として、ソーヒーのレルド（ye Laird of Sauchey）を選んだStirling Council Archives services, CH2/1242/1/29。スターリングプレスビテリは9月25日開かれ、3名の牧師としてセント・ニニアン教区のジェイムズ・エドモンストン、ガーガンノック教区のウィリアム・ジャスティス、クロックマナン教区のエドワード・ライト、牧師以外ではバロンとしてトゥハダンのサー・ウィリアム・マリ（Sir William Murray of Touchadan）を選んだStirling Council Archives Services, CH2/722/5/300-303。3人の牧師はともに1637年10月18日の祈禱書反対請願に署名している[(4)]。

ラナークプレスビテリでは、9月25日に総会への代表を決定している。ダンディー（1597年5月）の教会総会の例を引いて、一つのプレスビテリから3人の牧師とバロンの名において一人の長老を派遣するとし、牧師の候補として6人挙げ候補者を退場させてそのうち3人を選び、長老としては3人の候補を挙げ候補者を退場させて1人を選んだ。選ばれた3人の牧師は、ウィリアム・リヴィングストン、アレグザンダ・サマヴィル、リチャード・イングリッド、長老はラミントンのウィリアム・ベイリであったCH2/234/1/127。リヴィングストンとサマヴィルは祈禱書反対請願を推進しようとし、契約を奉ずる同プレスビテリでそれまでも指導的な役割を担ってきた。

パースプレスビテリも各教区からの牧師と長老が集う9月26日の会合で代表を決定した。長老としてはリンド教区を代表するウィムズ伯ら2名が欠席した。選出されたのは、牧師としてジョン・ロバートスン、ロバート・マリ、アレグザンダ・ピートリ、長老としてウィムズ伯であったCH2/299/1/372-373。ロバートスンとマリは37年9月の早きから祈禱書反対請願に活躍していた。

4つのプレスビテリにおける代表選出の共通点は、どれもが牧師は3名選出していること、祈禱書反対請願を早い時期から行った牧師を主力としていること、23日から26日の短期間に集中していねいな記録が残されていることである。この素早い動きはテーブルズの指令によるものと考えられ、すでに9月6日以前に、すなわちハミルトン到来以前に各地に手紙が送られていたものと推定される。いっぽう、ほかのプレスビテリは平信徒を1名選出しているが、カーコーディプレスビテリが補助出席者として計6名の平信徒を代表に送っている。また、ウィムズ伯は、その本拠地がウィムズ教区であるにもかかわらず、あえてそこから選出されずに、リンド教区の長老としてパースプレスビテリから選出されている。契約派内部で密接に連絡を取り合い、段取りが決められていたことの傍証といえよう。

主教制の区割が移行するプロセス

教区クーロスは、16世紀にはダンフェムレンプレスビテリに属していたが、主教制が確立されていた1630年代はダンブレイン主教の采配のもとにあった[(5)]。9月16日教会総会開会のための代表選出というプロセスの中で、同教区は長老サー・ジョージ・プレストンを、かつて属していたダンフェムレンプレスビテリに送り出すことを決定したCH2/77/1/59。実際グラスゴー教会総会は、主教制の区割を消滅させ16世紀のシステムをふたたび稼働させた。クーロスの動きはこれを先取りする動きといえるとともに、契約派は9月16日の早きに、主教制廃止を視野に下準備を進めていたことがうかがえる。

このようにシステムが大転換する1638年9月の時点で、主教制体制下で教育を受けた神学生は戸惑いを隠せなかったと考えられる。9月25日のカーコーディキルク・セッション記録によれば、三人の神学生が試験に来なかったのであるCH2/636/34/380。

教会総会への自治都市代表の選任

自治都市もグラスゴー教会総会に直接代表を送ることになった。都市キングホーンが代表を決定したことの報告が、カーコーディプレスビテリに9月27日に入っているCH2/224/1/246。都市カーコーディも同市の助役の総会代表選出を10月4日のプレスビテリに伝えているCH2/224/1/246。都市スターリングでは10月8日に市参事会とキルク・セッションが合同で会合を持ち、市長を代表に決定している[(6)]。都市モントローズは10月10日Angus Archive, M1/1/175、バーンタイランド市参事会は9月22日助役、ジョージ・ガーディンの派遣を仮決定していたがB9/12/7/42-43、10月10日正式決定し16日のセッション記録がこれを承認しているCH2/523/1/305。11月6日には、ガーディンの補助出席者として、もう一人の助役、ロバート・リチャードスンもグラスゴーに行くことになったB9/12/7/49。都市クーロスは10月14日のキルク・セッション記録にベイリの都市代表選出を記しているCH2/77/1/59。都市パースでは、10月31日に市参事会とキルク・セッションが合同で会合を持ち、ギルド長を代表に決定している。市

参事会の議事録の文はスターリングと重複する箇所もあるのでPerth and Kinross Council Archive, B59/16/2/136A、この二つの都市は緊密に連絡を取り合っていたことがうかがえる。上記の都市の選出記録のうち、教会にまったく言及がないのは、モントローズのみである。それ以外の都市は何らかの形で地域の教会と接点を持ち、教会総会の代表を選ぶという原則に配慮を示した。

「国王契約」（King's Covenant）

教会総会の招集が決定された9月22日の同日、ハミルトンと枢密院が、国民契約の一部となっている、1581年の否定信条と1589年の反カトリックの盟約をあわせた「契約」を署名に供した。これはのちに、「国王契約」と命名されることになる。牧師たちはこの「契約」に疑義を抱かなかったものの、契約派指導層の一人ウォリストンは、国王に対する不信感からこれを警戒し、すぐさま契約派貴族のロシスやロードン、牧師のアレグザンダ・ヘンダースンと連絡を取り、文書のあいまいな点を指摘して「抗議」声明を出した*Revolution*, pp.108-110。その効果もあって、「国王契約」の署名は、全署名約２万八千のうち１万２千が北東部と中央ハイランドからであった。これ以外の署名は、ハミルトンの本拠地や有力な枢密院のメンバーの勢力圏に限られた。さらに法務長官ホープ（Lord Advocate Hope）は４人の高等法院判事の賛同を得て11月２日に声明を発表し、主教主義による教会統治を不法であり否定信条と矛盾するとした。これを受けて契約派指導層は、国民契約と国王契約は両立し、双方の署名者は、パースの五箇条と主教制に反対表明したことになるとした*Charles* I, pp.185-186.

「国王契約」の情報は、都市が派遣した代表を通じてバーンタイランド市参事会にすぐに届いた。9月28日の記事によれば、「説明なしに短い信仰告白に署名するようにという布告」に対し、バーンタイランドには「この新しい契約に反対する抗議」も届いていた。市参事会が受け止めたのは、「抗議」のほうであった。参事会はこの短い信仰告白に署名せず、逆にそれに対する抗議を十字路に示すことにしたからであるB9/12/7/43-44。バーンタイランド市参事会は迷う間もなく、国王を警戒するウォリストンの見解に同調した。

パースプレスビテリにおける主教解任の準備

テーブルズは、主教解任を意図し主教についての否定的な情報を集めた。10月24日のパースプレスビテリ記録によると、この日以前に同プレスビテリはテーブルズからの手紙を受け取った。この手紙を受けて、翌月曜日に、ジェントルマン、都市民、牧師の集会が開かれる予定となったCH2/299/1/374。さらに２週間後の11月７日のプレスビテリ記録によると、ジェントリ、市民、当該プレスビテリの名においてレルドなど３名の者からダンケルド主教への「不満」がプレスビテリに提出された。「不満」に対する応答は教会総会でなされ、告発者は「不満」の確証のため総会に出席する。この「不満」は、当該プレスビテリの管轄内の教区の教会で、説教の前後のいずれかで読み上げられる。この「不満」はプレスビテリ記録に記載されるCH2/299/1/375とある。ただし実際にはことはこのように進まなかった。現在残るプレスビテリ記録に記載はなく、教会総会でのダンケルド主教解職の議事も、主教という存在に正統性がないという議論で成り立っており、個人的な所業があげつらわれてはいない[(7)]。契約派は戦術を転換したものと考えられる。

軍備の進捗

教会総会が近付く中で軍備は進んだ。カーコーディプレスビテリが、10月11日に「11月１日にすべての教区で武器の数に注意を払うよう」命じているCH2/224/1/247。

10月24日前に、バーンタイランドの沖合にロンドンからアバディーンに向かい弾薬を積んでいるという２隻の船が現れた。24日の市参事会は、この船を注視し情報の真偽を確かめ、税関の副官と周囲のレルドの協力を得て強制力を持ってとどまらせることを決定したB9/12/7/48。市参事会は、王から反契約派の地盤アバディーンに弾薬が送られて、契約派の弾圧が始まるものと警戒し、船を動かさないようにしたと考えられる。

バーンタイランドと牧師　市参事会と牧師との交渉

バーンタイランドの牧師問題は全く解決していなかった。市参事会は、当座はプレスビテリの牧師に巡回してもらって切り抜けようとしたがB9/12/7/42、郊外地域の教区地主たちは、カーコーディプレスビテリに属する牧師が転任してくることを望んでいる一方でCH2/224/1/245、市参事会はファイフのクーパーの牧師からはウィリアム・リヴィングストンを後押しする手紙を受け取りB9/12/7/46、事は暗礁に乗り上げていた。

そこでまず参事会はマイケルスンと交渉することにした。市参事会は聖餐式の執行について尋ねたところ、10月21日のバーンタイランドキルク・セッション記録によれば、助役が出向いてマイケルスンに尋ねたところ、プレスビテリの牧師、ウィリアム・ネアンや４名の牧師の名を挙げ、そのうち２人が聖餐式をやるのがよい、または、15日猶予をくれれば本人が執行するかもしれない、あるいはプレスビテリがよいと思う人が執行してもよいのかもしれない、と答えているCH2/523/1/306。しかし11月３日の市参事会記録によると、彼自身が市参事

会に来て言った。11 月 4 日の教会総会のための国王の断食の布告に従う。その布告を教区民につたえる、座って行う聖餐式を執行する、教会総会への自治都市バーンタイランドの代表を承認する署名を行う、その理由は国王の布告だからである、と述べた。この発言をどう受け止めてよいのか市参事会は迷い、「ジョンは、契約派ではないし、契約を署名しようとしない」という理由で、アドバイスを得るため助役をプレスビテリに派遣することにした。さらに記録は続く。マイケルスンは市参事会の前で言った。「主教は非合法で法王教的だというような牧師はだれであれ、間違った教義を教えている」と B9/12/7/49。この時点で仮にマイケルスンが座って行う聖餐式を執行したとしても、思想信条の相違は乗り越えがたい、と市参事会が考えていたのではないだろうか。

マーキンチ教区の状況

契約を拒否しているアンドルー・ラーマンスを牧師とするマーキンチ教区は、バーンタイランドと類似のケースである。しかしマーキンチはバーンタイランドが自治都市であるのに対し、バロニ都市であるという違いがある。カーコーディプレスビテリ記録から同プレスビテリとラーマンスとの関係をまとめておきたい。

9 月 13 日にマーキンチのレルド、オークマウティが願い出たところによれば、マーキンチにもプレスビテリが牧師の一人を派遣し聖餐式を執行してほしいとのことであった。プレスビテリは即答せず、牧師ラーマンスを呼び出すことにした CH2/224/1/244。

9 月 20 日のプレスビテリ記録によれば、ラーマンスは「あえて危険を冒さない」という理由で出頭しなかった CH2/224/1/244。24 日のプレスビテリは 4 名の牧師を指名してマーキンチで聖餐式を行うように手配し、かつ再びラーマンスを召喚した CH2/224/1/245。10 月 18 日の再度の呼び出しの後 CH2/224/1/247、11 月 1 日のプレスビテリ記録は、ラーマンスが姿を現さないことを述べたのち、さらにこう続けた。マーキンチの長老たちがラーマンス博士を非難する文書を提出した。牧師ジョン・スミスに指示してラーマンスにその文書を参照させるようにしたという CH2/224/1/248。11 月 8 日の記録には、ラーマンス不出頭に対する彼の弁明が記されている。プレスビテリを軽視していたのではなく、不安のためであったと。プレスビテリは、決定を教会総会後に延期した H2/224/1/249。マイケルスンの場合と同様、思想信条の問題であり話し合って解決できる見通しを両者ともに、持っていなかった。そのようななか、教会総会はまだ開かれておらず事態は流動的であった。

3　グラスゴー教会総会とその影響

教会総会の経過

教会総会は、契約派が主導権を握ることができるようテーブルズのメンバーを中心に手筈が整えられていた。すなわち 11 月 19 日に国民契約の起草者アレグザンダ・ヘンダースンを議長に、書記をウォリストンのサー・アーチボルド・ジョンストンと決めておいた。一方国王代理として、チャールズはハミルトンを派遣した。

11 月 21 日総会の場所グラスゴー大聖堂には大きな人垣ができていた。議長を決めるための話し合いが始まった。22 日ハミルトンの遅延工作にもかかわらず議長はヘンダースンに決定した。書記については、ハミルトンはすでに臨時の議長となっていたトマス・サンディランドを推薦した。サンディランドは、次第に国王が教会総会を操作していく 1590 年以降の教会総会の記録を提出していたのである。しかし選ばれたのは、ウォリストンで、彼は、教会総会が強力で独立的であった 1560 年から 1590 年までの記録を提出した。これは契約派の主張に大義を与えることになった。24 日から 26 日までかけて教会総会の代表メンバーを確定した。27 日、議長ヘンダースンの補助出席者（assessor）が契約派であるテーブルズのメンバーで固められて、正式に教会総会が開始された。総会の手続きや合法性について、ハミルトンの後援を得て反対が 2 件出された。しかし何の効果もなかったのでハミルトンは、28 日教会総会の解散を命じ、自ら退席した。

ハミルトンの退席後、教会総会は主教制の廃棄、長老主義的教会統治の確立に向かった。具体的には、1606 年から 18 年までの教会総会が無効とされ、またカノン書と祈禱書、高等宗務裁判所が、教会や議会の承認がなく合法ではないとされた。さらに主教制、パースの五箇条が廃棄され、大主教、主教、7 人の牧師が解任された。主教らは、悔い改めて教会総会に従わない限り破門されることになった。続いてキルク・セッション、プレスビテリ、シノッド、教会総会が 1581 年に持っていた権限を回復させた。このようにして長老主義的教会統治を確立し、かつ次回の開催日時と場所を決め、12 月 20 日に散会した *Revolution,* pp.116-126。この教会総会の中で、主教の廃止と同時に主教区も廃止され、1560 年の規律の書に記された監督の区割が、1638 年の教会総会後から新たに始まるシノッドの領域に移行することになった [(8)]。この教会総会では、カーコーディ教区の第二牧師ロバート・ダグラスは立法準備の委員会のメンバーとなり [(9)]、パースのセント・ジョンストン教会の牧師ジョン・ロバートスンはジェイムズ治世の教会総会

を精査し欠陥のある総会を無効とする委員会の長を務めた *Letters,* Vol.1, pp.148,151-152. メスヴェン教区の牧師ロバート・マリは、教会記録を精査する委員会のメンバーとなって活躍している *Letters,* Vol.1, p.130。

契約派は、おそらく国王との全面対決も覚悟の上で周到に準備して長老主義的教会統治を確立させた。次に述べるカーコーディプレスビテリ内の二人の牧師の解任も、総会の会期内に非公式に道筋が作られていた。教会総会は契約派の結束を固め、それまでの「反体制」が新たな「体制」となったと明示する機会となった。もちろん、国王とハミルトンはこれを認めず、12 月 18 日枢密院はグラスゴー教会総会のすべての法を無効と宣言した [(10)]。

教会総会が終わり、各地のプレスビテリは主教の破門などの総会の結論を各教区教会で告知すべきとした。カーコーディプレスビテリは 1638 年 12 月 27 日に CH2/224/1/249、パースプレスビテリは 12 月 28 日に範囲内の教会が「一月最初の日曜日に、総会の祝福とよき成功に、厳粛な感謝をささげること」を命じた CH2/299/1/375-376。12 月 30 日にはスターリングプレスビテリ内のクラックマナン教区教会が教会総会の法を告知した Stirling Council Archives Services, CH2/1242/1/30。1639 年の 1 月 3 日スターリングプレスビテリは、同じく総会の内容が告知されるべきであり、かつ感謝の礼拝をすべきとした Stirling Council Archives Services, CH2/722/5/305-307。

マーキンチとバーンタイランドの牧師解任

バーンタイランド市参事会は、教区民が教区牧師を拒否している事態の解決を、教会総会に見出そうとしていた。1638 年 12 月 11 日の参事会は、すでに市が派遣した都市代表ジョージ・ガーディンが教区牧師マイケルスンの助手として働く第二牧師を獲得する活動の許可を与えた。さらにその新たな牧師が主任牧師となる可能性も示唆した B9/12/7/52。

グラスゴー教会総会は、ジョン・マイケルスンのケースにどのように対応するのかの指針を決定していた。1639 年 1 月 7 日のバーンタイランド市参事会記録上に記されている。すなわち、このケースに対処する委員会を組織すること、教会総会で成立した法の総覧を作成してマイケルスンに見せ、それを彼が是とするか否かを確認する、とのことであった B9/12/7/54。一方事実上、教区教会の活動が停止している状況で、バーンタイランドキルク・セッション記録は、1638 年 12 月 23 日に、長老もなくセッションの活動もない、とした。その理由は、「牧師が、プレスビテリの牧師たちと彼の教区の人々と意見が異なり、契約と教会総会に正統な権威はないと、それらを非難しているからである」と記した CH2/523/1/306。

1639 年 1 月 3 日、カーコーディプレスビテリは、契約に賛同しないバーンタイランド教区のジョン・マイケルスンとマーキンチ教区のアンドルー・ラーマンスを呼び出すことにした CH2/224/1/250。1 月 15 日、バーンタイランド市参事会はマイケルスンに高位聖職者が破門されたこと、契約を署名しなければ牧師職から解任されることを伝えることにした B9/12/7/54。1 月 17 日のカーコーディプレスビテリ記録によると、グラスゴー教会総会の合法性を認めるかの問いに対するマイケルスンとラーマンスの答えは同一で、「議会が教会総会の法を承認するまで認めない」ということであった。ラーマンスら 2 名を審判するのは、ジェイムズ・シムスン、フレデリック・カーマイケル、ジョージ・ギレスピ、書記とジョン・ウィリアムズに委ねられることになった CH2/224/1/251。

1 月 21 日のバーンタイランド市参事会記録は重要である。二人の牧師に判断が下される 1 月 24 日を前に、市参事会はロバート・リチャードスンをはじめとする助役や市参事会員 9 名を、牧師の問題の解決のために、その案件を処理する力をもつ者としてプレスビテリに派遣することを決定した。彼らは「不正常な状況と、彼が過去長い間説教して来た間違った教えについて」マイケルスンに苦情を言う役割であった。その苦情は、さらに「パースの五箇条を維持したこと、法的な正当性を欠く彼の息子に聖礼典をおこなわせたこと、契約に反対する彼のその息子の教えを安心して聞けないこと、公私の場で契約を黒い契約と呼び「権威をもたない人間の発明物」と述べたこと、「集まっている諸身分は、陛下の頭から王冠を引きずり落とすことである」と述べたこと、『主教が不法な存在で法王教的である』と説教する者は、誤りであるとの見解を肯定して、主教制支持を維持していること、長い間、教理問答をさせていないこと、先の教会総会を認めずプレスビテリに求められたにもかかわらず主教の破門を伝えなかったこと、委員会とプレスビテリの前に現れなかったことなどであった B9/12/7/55。

1 月 24 日のカーコーディプレスビテリ記録に、2 人の牧師への審判の結果が掲載されている。以下はその内容の要約である。

教会総会から指示された事柄として、平信徒の長老（貴族、レルド）を含む、セント・アンドルーズ、クーパー、カーコーディプレスビテリから選ばれた人々が 2 人を審判する委員となった。マイケルスンに対する不満が訴えられていたのでマイケルスンを 3 回呼び出したが来なかった。委員はマイケルスンに対する不満が真実であるかを審査するものとして 2 名の牧師を指名した。その牧師たちは

その証言が真実であると確定し、マイケルスンら２名がこののち１週間以内にプレスビテリ出頭してそのメンバーを納得させない限り、解任とするという審判を下した。

次にプレスビテリ記録はマイケルスンについて、このように記す（要約）。

マイケルスン解任の理由は、１、数十年人々に教理問答をさせていない。２、「貴族たちが集会で行なっていることは、国王陛下から王冠を取り下ろしそれを自らの頭に載せることだ」と彼が助言したことを、公に肯定した。３、契約を暗黒契約と呼んだ。法的に牧師の職能をもたない息子を、説教と聖礼典の執行をさせた。これらの事柄ははっきり証明された。そのためこれらとその他の理由のために、解任に価する。その他の理由は、教会総会の合法性を認めず、主教の破門と解任を伝えるべきとされたのにそれをせず、また教会総会によってカーコーディとダイサートに設けられた委員会の権威を拒否したことである。２月７日にプレスビテリに出席し教会総会の合法性を認め、その制度を受け入れ、総会の宣言に従った信仰告白に署名し、今までの言動を悔い改めること。もしそうしないなら同日プレスビテリはマイケルスンの職を解き、バーンタイランドの牧師は空席になったと宣言する CH2/224/1/252。

ラーマンスについては以下のように記している。

彼は合法的にプレスビテリよって委員会に呼び出されたにもかかわらず出頭しなかった。そこで委員会は、ラーマンスに不満をもつレルドたちの訴えを取り上げた。彼が契約の署名者を「偽証者」と呼んで叱責したことが証明された。委員会は解任に価するか検討した。前述した契約派への叱責や契約署名拒否の頑迷さ、出頭拒否、教会総会の合法性の否認、主教の破門と解任の未伝達が証明され、彼自身が解任に価する。２月７日までになすべきこととそれを行わなかった場合の結果については、マイケルスンの場合と同じである CH2/224/1/254。

市参事会がまとめたマイケルスンに対する不満と、委員会での決定の理由とを比較してみよう。市参事会の不満は 10 項目で、決定理由は７項目である。この７項目はすべて市参事会の 10 項目のうち見含まれる。委員会の決定は、市参事会の不満を元に作成したといえよう。では、委員会は何を除いたのか。それは、マイケルスンのパースの五箇条と主教制支持、そして、息子の教えを安心して聞けないことであった。うち、パースの五箇条と主教制支持は、マイケルスンが活躍した時代には合法的で強制すらされたので、その堅持を理由に解任はできないと委員会は考えたのであろう。また息子の行動を父の解任の理由にするのは適さないと考えたのであろう。

さて、市参事会によればマイケルスンは「集まっている諸身分は、陛下の頭から王冠を引きずり落とすことである」と、委員会によれば「貴族たちが集会で行なっていることは、国王陛下から王冠を取り下ろしそれを自らの頭に載せることだ」と言っており、それが解任の理由の一つとなったのは、大変興味深い。なぜなら主教派の牧師から見て契約運動がどう見えるかを示した表現であり、またマイケルスンの予言は、現実の歴史の中で 10 年後に的中するからである。すなわち主教派の彼から見て契約派は、宗教上の請願を行っているといっても、結局国王大権を犯しそれをわがものとしているのだった。国王の宗教政策に反対請願し、その請願者が集会を通して国政を握っていく状況の重大性が、解任させられた牧師の目からははっきり見えていた。

ラーマンス解任事由のポイントは、委員会に来なかったことであり、さらにマイケルスンの事由と共通の、教会総会の無視、主教の破門と解任の未伝達が挙げられている。彼らの解任事由はいずれも政治的であった。

その後の経緯を見てみよう。1 月 31 日付のカーコーディプレスビテリ記録によると、ダイサートの牧師がマイケルスンの元に行き宣告を伝えたが、「プレスビテリに満足を与えなかった」。ラーマンスはプレスビテリに出席し、疑問を呈したので、プレスビテリは牧師のジョン・スミスとジョージ・ギレスピを遣わすことにした CH2/224/1/256。

解任宣告から２週間後の２月７日、委員会は 24 日の宣告を踏襲する形で、ラーマンスとマイケルスンの解任を決定した CH2/224/1/257-258。翌日２月８日のバーンタイランド市参事会記録は、委員会による解任を伝えた。市参事会は、解任状を教会の書記ジョン・アダムスンがプレスビテリよりもらいうけ、写しをマイケルスンに渡すよう命じた B9/12/7/57。２月９日のバーンタイランドキルク・セッション記録は、解任の経過と事実を記し解任状を掲載した。最後に「マイケルスンは 1616 年 1 月 25 日就任し、1639 年 2 月 10 日に解職された。彼がバーンタイランドの牧師であった全期間は、23 年となるだろう。」と書きとめた CH2/523/1/308。

主教派の牧師を教区民がボイコットしたので、教会には閑古鳥が鳴き、市参事会は対策を迫られた。若手の第二牧師を置いて実質的にはその若手が司牧をおこないマイケルスンを平和的に引退させる、と市参事会はシナリ

オを書いたが、当人の拒否に会い挫折した。市参事会はすぐには第二牧師の招聘をあきらめなかった。しかしグラスゴー教会総会が曖昧な世代交代でなく、解任空席として新任者を入れるという方向を打ち出した。市参事会とマイケルスンとの関係も悪化していたので、市参事会は解任の事由をあげて委員会に審議させた。委員会はそのいくつかを削除して解任事由とした。削除されたなかにマイケルスンのパースの五箇条の実施があった。議会法の順守が解任事由とはならなかったが、バーンタイランドの教区民にとってパースの五箇条の強制が耐え難いものであったことを示していよう。教会総会を契機に契約派は人事面での純化に踏み出した。革命に加速度がついたことを示していよう。

同時に平信徒に対しても、契約に署名しない者に対する警戒が始まった。カーコーディプレスビテリに出席したバーンタイランドのベイリ、ロバート・リチャードスンは、プレスビテリから非契約者が契約に署名するようにさせることを望まれており、その要望が1639年2月4日の市参事会記録に残されているB9/12/7/56。

スターリングプレスビテリの国民契約挿入

1639年4月4日のスターリングプレスビテリ記録は次のようにいう。「同日牧師たちは、教会総会の合法性を認め、そのすべての法に従うことを約束する。そして契約と信仰告白と総会がなしたその説明を、プレスビテリ記録に挿入する」Stirling Council Archive Service, CH2/722/5/314-315と。実際そのあとに国民契約と署名が記されているStirling Council Archive Service, CH2/722/5/314-330。

スターリングプレスビテリの活動には不明な点があった。祈禱書反対運動に参加しているにもかかわらず、プレスビテリ記録にその記載がなく、国民契約についても3月15日の記事の「同日同僚の牧師たちは契約がこのプレスビテリの範囲でどの教区も15日後の4月1日に読み上げられるべき」Stirling Council Archive Service, CH2/722/5/292という内容がすべてで、どの教区が実際に誓約を行い、あるいは行わなかったかの事後調査もない。また、スターリングプレスビテリは教会総会に公式に代表を送っており、いまさら「合法性を認める」というのも奇妙である。いっぽう、39年4月のパース・スターリングシノッドには欠席しているCH2/154/2/2。メンバーの中に、全体の状況をみたいという声があったのか、見えない形で契約反対派の力が大きかったのかと推定する。しかし戦争が近付く中で、旗幟を鮮明にする必要に迫られ、契約とグラスゴー教会総会の側に立つことを明示したと考えられる。

牧師ジョン・モンクリフの移動

老齢の牧師の教区に助手を送り、スムーズに世代交代を図っていくやり方は、すでにオクターディラン教区で実現していた。一方、バーンタイランド教区ではマイケルスンが拒否したために、市参事会が強く望んだこの形の牧師交代は実現しなかった。この方式が試みられる三番目のケースが牧師アレグザンダ・スクリメジャの在職するキングホーン教区である。当該牧師は1639年2月のプレスビテリを欠席していた。おそらく病気か老齢のためであろうCH2/224/1/259。

3月14日都市キングホーンの助役と書記がカーコーディプレスビテリに出席し、クーパープレスビテリ所属のコレシ教区の牧師ジョン・モンクリフを移動させるよう、カーコーディプレスビテリがクーパープレスビテリに手紙を書くよう願い出た。なお、キングホーン市参事会とモンクリフの間では既に合意が成立していると述べているCH2/224/1/261。3月28日には、都市キングホーンの代表者は、同意を与えたクーパープレスビテリの手紙を提出したCH2/224/1/261。金銭的な条件も整備されて、4月11日には正式にモンクリフがキングホーンの助手として着任することになったCH2/224/1/263。キングホーンの場合も、バーンタイランドと同様実際の牧師の選定には市参事会が活躍している。またモンクリフは、1637年祈禱書反対請願を行ったクーパープレスビテリの議長であってRPCS, 2-6, p.707-708、いわば筋金入りの契約派をキングホーン市参事会が引き抜いたといえよう。

4　第一次主教戦争

第一次主教戦争の経過

1639年1月の初めにロシス伯などの指導的な契約派貴族はエディンバラに集まって会合を開き、全国に指令する手紙を作成した。その最初はエディンバラと各州の情報伝達システムの確立であった。州の代表の一方は三カ月交代でエディンバラに滞在し他方は地元にとどまる。エディンバラ滞在者は協議し情報や指令を伝える。地元滞在者は情報を各プレスビテリの代表者につたえる。プレスビテリから教区の代表者に伝達するというシステムとした。また州の戦争委員会（Shire committee of war）を編成する指令がなされた。これは各プレスビテリからの代表からなっていた。この委員会の役割は適切な武器を装備させて兵を集め訓練し実際に兵役に送り込むことであった。この委員会は州の出す軍隊の司令官も決定した。さらに三十年戦争で他国の政府に雇われて軍役についている将官たちに、帰国を促す呼びかけがなさ

れた *Revolution*, pp.127-131.

契約派はこうした軍備に加え、代表に王への教会総会からの嘆願とその他の書類をもたせ王に面会させようとしたが、それが実現する前に彼らは王のイングランド貴族にあてた1月26日付の手紙を見た。そこにはスコットランドからの侵入に抵抗し4月1日にヨークに集まるよう命じたものであった。これに対し、契約派は、『イングランドのすべての良きキリスト教徒への知らせ』という文書を発した[11]。内容は、問題にしているのは宗教の事柄のみで、国王に忠誠をつくしイングランドに侵入する意図はない、イングランドとの結びつきをむしろ私たちは強めようと考えている、と要約できる *Revolution*, p.131.

ところでこの文書について興味深い事例がある。カーコーディプレスビテリに属するキングホーンのキルク・セッション記録は、一冊目の通常の記事が1632年1月22日で終わっている。その後空白があって、日付のない『イングランドのすべての良きキリスト教徒への知らせ』の最初の約6分の1の部分の筆写が突如現れるも、それで一冊目は終わる CH2/472/1。1639年2月時点での牧師はアレグザンダ・スクリメジャであった[12]。2冊目のセッション記録は、1639年9月に始まっている CH2/472/2。すなわち、教区の記録の空白が続く中で、『イングランドのすべての良きキリスト教徒への知らせ』の一部が書きうつされて残っている CH2/472/1/244-5。これが物語るところは、この文書がキングホーンにも配布されて、重要で筆写すべきことと考えられたことを示している。

さて、39年2月頃から流血のない小競り合いがスコットランド東北部で起こっていた。1639年1月の段階でアバディーン市参事会は、ハントリ伯を背後に、武力を用いてでも契約を拒否することを決めた。グラスゴー教会総会の法や他の契約派の文書はアバディーン市では公開されなかった。2月14日契約派の集会がタリフで持たれることをハントリが知ると、彼は同日同場所で自分の支持者を集めることにした。しかし戦わず引き返したのは、ハントリのほうであった。ハントリの逃げの姿勢を見て契約派はアバディーンを占領し彼を蹴散らそうと準備した。実際モントローズ伯とアレグザンダ・レズリが東北部に進軍し、ハントリは抵抗の意を示さず手持ちの軍勢を解散させた。都市アバディーンはこれをみてあきらめ、3月30日に占領された。スコットランドにある城も、小規模な軍事衝突の末3月末までに契約派の手に落ちた *Revolution*, pp.138-140。

国王とハミルトンの作戦は、ハミルトンが艦隊をフォース湾に差し向け脅したところで、チャールズは国境から北進するという算段であった。4月1日にイングランド貴族をヨークに集合させて王は進軍を始めた。5月1日ハミルトン率いる艦隊がフォース湾に現れた。5月9日付のカーコーディプレスビテリ記録は「フォース湾の王の船のために前回の聖書釈義はなかった」と、緊迫した状況を示唆する CH2/224/1/264。艦隊出現に、沿岸をぐるりと篝火がたかれた。これを見て兵の訓練不足を意識していたハミルトンは上陸を決断せず、上陸断念を知らせる王への手紙を7日までに書いた *Revolution*, pp.143。一方チャールズは、1639年5月6日にニューカースルに到着した。5月19日国境の川ツウィードをはさんで小競り合いのあった後、6月4日、スコットランド人がケルソに陣地を築きつつあるという情報を得たイングランドの指揮官ホランドは、ケルソに攻め込んだ。しかし多くのスコットランド兵に取り囲まれたと思い込んだ彼は、すぐに退却した。この退却はイングランド軍の士気を喪失させた。6月5日レズリは国境近くのダンズローに進軍した。そして和平交渉を申し出た。王はこれを受け入れ、ベリックの和平条約は6月18日に成立し、軍を解散し契約派は王から「スコットランドの法と宗教の保持」するとの言質をとった[13]。この後の歴史が示すように、王はこれを真剣に受け止めたのではなく、時間稼ぎのための方便であった。

各地から代表の参集と運動

国王との軍事的な対決が必至の状況になる中で、各都市から、またプレスビテリからは代表をエディンバラに派遣し続けてきた。パース市参事会は2月16日に Perth and Kinross Council Archive, B59/16/2/142A、バーンタイランド市参事会は2月16日に B9/12/7/57-58 それぞれエディンバラ派遣を決定した。一方教会関係では、スターリングプレスビテリが2月28日に牧師のエディンバラ派遣を決定し Stirling Council Archive Service, CH2/722/5/312 をエディンバラに派遣、3月7日のカーコーディプレスビテリの会合は、多くの牧師が「教会の集まりのため」エディンバラに行っており、閑散としていた CH2/224/1/260。

州の集会や州の戦争委員会

契約派はさまざまな次元で会合を開き、意志決定を重ねていった。ここから紹介するのは、州レベルでの会合である。まず手紙によって招集された。

1月15日のバーンタイランド市参事会記録によると、手紙の発信者はウィムズ伯、内容は、「翌週の水曜日クーパーでファイフの貴族、ジェントルマン、都市の会合がある。目的は、境界内にいる人々の武器を整え、だれが武器を持っているかを見るためである」B9/12/7/54。

同じ種類の会合は「戦争委員会（committie of war）」

と名付けられ、2月3日にパース市参事会も代表派遣を決定している。やはりそれは、2月5日ダンディーで開催される予定の「貴族、ジェントリ、残りの都市」の会合で、議題は戦争委員会についてと「手元にある一般的な問題について」であったPerth and Kinross Council Archive, B59/16/2/142A。

都市パースに来た同じ指令が、おそらくテーブルズからバーンタイランドに届いていた。2月14日の参事会記録によると2月20日に「いま手元にある大きな問題に対してどのような秩序が最適であるか考えるため」州の貴族の委員と牧師が集まることになっており、都市からの代表も行くことになっていたB9/12/7/57-58。

ところが、2月18日の参事会記録によると、この日以前に「貴族と州の代表の会合」がマーキンチで開かれたようだ。そこで戦争の規律についての令状を受け取り、また武器がどの程度行きわたっているのか調べることになったB9/12/7/57-58。

3月になると州の戦争委員会による態勢作りが一層進められた。ロシス伯からブレイクバーンのサー・ジョージ・ハミルトン、そしてバーンタイランド市参事会にわたってきた手紙は、4月13日にクーパーで「州のすべてのジェントルマンの公の集会」が集まる必要をいい、市も代表を送ることになったB9/12/7/59。その13日での集会では、ハントリの軍に対応する貴族たちはアバディーンに向かう予定で、バーンタイランドからも兵を派遣する。当局はだれが兵として派遣するのか選ぶことになったB9/12/7/60。

4月のバーンタイランド市参事会記録によれば州ごとの集会は2回持たれた。一回目はサー・ジョージ・ハミルトンから手紙がきて、カーコーディ以北のファイフ全体の集会として開かれることになったと4月3日の記録にあるB9/12/7/61。9日の市参事会は、キングホーンで「委員会」(おそらく戦争委員会)への代表を決定している。その目的は「南(戦場となりうる国境地帯)に行く人々」を送り出すためであったB9/12/7/62。5月28日には参事会はカーコーディの「戦争委員会」にこの都市の意志を忠告し相談するため代表派遣を決定した。

バーンタイランドと戦争

都市バーンタイランドは、第一次主教戦争にどのようにかかわっていったのだろうか。2月4日「州の貴族やジェントルマンは命令を下した」として、おそらくファイフの戦争委員会の決定を実行に移した。それは助役と市参事会が「だれがどのような武器を持っているのか」把握することであったB9/12/7/56。このあと、都市バーンタイランドは戦争準備を着々と進めていった。2月14日には「この王国内のすべての自治都市が武器を使えるようになるよう訓練していることを理解し」貴族から命じられてだれが武器を持っているかを調べ、また、都市を4つの区域に分け、その区域が日をきめて訓練する。またそれぞれの区長(quarter master)を決めたB9/12/7/57-58。3月7日には兵役訓練の責任者(Dreill master)の就任を決めB9/12/7/58-59。貴族と州代表、牧師からなる2月20日の会合の伝達事項として、3月12日の記録によれば、この王国の都市に住む者はみな、利子や賃料の10%を戦費のために支払うことになったB9/12/7/59。

3月には実戦の準備がバーンタイランドでも始まっていた。3月19日、都市バーンタイランドは8名の志願兵に装備を十分与えてアバディーンに送り出した。目的はハントリを拘束するためであり「彼は契約派でなく、全王国に脅威とトラブルを引き起こすから、彼はアバディーンに900人の手下をもっており、深刻な分裂をもたらすから」という理由であったB9/12/7/60。3月23日には翌月曜日に太鼓の音で、教会の庭に全住民が招集をかけられる予定が発表されたB9/12/7/60。

4月以降は、市内の自衛と北進する国王軍に対決する契約派軍への出兵が市参事会の責務となった。4月9日市参事会は会計係が弾丸用の2ストーンの鉛を入手するよう命じたB9/12/7/62。4月20日には、各参事会員が、船長のグループ、船員のグループ、手工業者の組合のグループなどと担当を決めて、そこから兵となるものを集めることにしたB9/12/7/63。戦費は、エディンバラの裕福な商人で主教戦争を財政面で支えたウィリアム・ディックが調達したB9/12/7/63。武器を持っていない市民、住民は市参事会の差配で武器を受け取り、4月27日には兵の召集が行われることになったB9/12/7/63。

4月30日には「国境に行く」志願兵を募りB9/12/7/63-64、5月7日の記録には、28名の志願兵の名が列挙されている。うち、職業などが記載されているのは、船乗り2名、パン屋1名、召使4名であるB9/12/7/64。この志願兵たちに市は弾薬を与えて送り出したB9/12/7/64-65。5月28日には国境付近に人を送って、バーンタイランドが送り出した志願兵を訪ねることを決定しているB9/12/7/65。

バーンタイランドの市壁の修理

東北部での小競り合いが始まった1639年の3月頃から、都市バーンタイランドはロシス伯を中心とする貴族やジェントリに要請されて市の城壁の拡大補強工事を行った。戦争を意識しての自衛策である。市参事会が頭を悩ませたのは、その工事費用の捻出であった。

市の財政には余裕がなかった。3月30日の記録によると、そこで都市内でお金がある人は50ポンド支払うことにし、参事会員らを中心にそれに応じた。さらにロシス伯やその郎党も支払うことを求めている B9/12/7/61。4月上旬に工事がはじめられ、市参事会員が一人ないし二人立ち会うことになった B9/12/7/61。城壁工事の財源のあてを求めておそらくテーブルズにかけあっていたのであろう、その答えが5月28日の記録によると「都市の中でその市民か住民のなかのだれかに借金をする」という回答があった B9/12/7/65。

アレグザンダ・ロバートスンは、参事会員のリチャード・ロスとジョージ・ガーディンに暴言を吐いたとして4月23日に彼は、叱責と処罰を受け謝罪を要求された B9/12/7/63。個人的な言い争いともとれるが、戦争の負担への潜在的な不満が参事会員にぶつけられた可能性もある。

スターリングプレスビテリと戦争

スターリングプレスビテリやその範囲内の教会と第一次主教戦争とのかかわりを見ていこう。国王軍が北進する状況の4月8日、「敵が突然私たちに近づいてくるかもしれないから」一週間後聖餐式をやると決定した Stirling Council Archive Service, CH2/1026/3/321。

4月29日から5月2日にかけて、スターリングプレスビテリは、その教区がスターリングシャーとクラックマナンシャーに属する牧師が、従軍牧師として南に向かう順序を立てた。なぜ州が関係するかといえば、軍は州ごとに連隊を組んでいたからである。4回派遣される予定で、1回2名ずつの牧師が参加する計画であった Stirling Council Archive Service, CH2/722/5/322-323。

パースと戦争

都市パースは東北部の小競り合いの時点から、第一次主教戦争にかかわった。3月5日のパース市参事会記録によると、「レルドとパースの牧師が市参事会にやってきて、パースから14日間アバディーンに派遣する武装した100名を出すことを望んだ。目的はモントローズ伯を助けるため」Perth and Kinross Council Archive, B59/16/2/142 であった。3月17日市参事会はアバディーンに100名派兵することに賛成した。市の公費で火薬費用を支出しそのため税査定を行うことになった Perth and Kinross Council Archive, B59/16/2/142。3月31日に、おそらく国王軍との対峙を想定して軍事訓練の開始を決定し、5月7日にジョージ・ブラウンを長とする軍を公費で送り出した。参事会記録はその大義を「この王国の宗教と平和、自由のため」と表現した Perth and Kinross Council Archive, B59/16/2/143

議会と自治都市総会の開催と反契約の署名

4月末議会開催の話が持ち上がっていた。スターリング市参事会は、4月29日に、5月15日議会開催のため市長を都市代表に決定し *Stirling Extract,* pp.182、バーンタイランドは、4月30日に第五テーブルとエディンバラにいる代表から手紙が届いたとして開催予定日を空欄のまま、代表者を決定している B9/12/7/63-64。しかし戦争が緊迫する中開かれなかった。一方ダムフェムレンでの自治都市総会は、7月2日開催予定ということで、パース市参事会は5月7日に Perth and Kinross Council Archive, B59/16/2/143、バーンタイランド市参事会は5月28日に代表を選んでいる B9/12/7/65。

6月6日のカーコーディプレスビテリ記録に次のような記事がある。船長のジェームズ・ローが現れ、「ハミルトン侯に強制されて、契約とグラスゴー教会総会に反対し、王の優越性と、契約派の大義に決して武装しないことを誓約したことに対する悲しみと心の動揺」を宣言した。さらに彼が「ハミルトン侯とサー・ジェームズ・ロックハートに強制されたことであると示そうと思うが判断してほしい」と述べた。これに対してプレスビテリは「そうしてかまわないし、そうすべきである」と答えた、というものである CH2/224/1/266-267。

バーンタイランドの牧師を求めて

バーンタイランドの牧師が空席となった。牧師がいない教区にはプレスビテリの他の牧師が輪番で当該教会の説教や洗礼、キルク・セッションの運営、結婚式の司式を務めた CH2/224/1/259 CH2/224/1/260。2月14日のバーンタイランド市参事会記録には、「プレスビテリの牧師がここに来るのは疲れるので、自分たちの牧師を獲得してほしい、といっている」と記されている。これに対する市参事会の応答は、「もしよい人を得られるならばふさわしいことであるが、さらなるアドバイスが必要である」とした B9/12/7/57-58。

動きのあったのは、4月9日でアンドルー・レズリ牧師の名が初めて出て、彼がレントの時期に来てもらえるかどうか、市参事会が交渉することになった B9/12/7/62。11日には市参事会員がレズリを連れてプレスビテリに行ったところ、彼が住んでいるところの証明書を提出するよう言った CH2/224/1/263。4月23日市参事会は、レントの期間、どのような条件で説教するか、レズリと交渉することになった。次期牧師の候補が浮かび上がってきたといえよう。

5　むすびにかえて

教会総会の準備が始まる1638年7月からベリックの和までの1年間までを観察すると、契約派の迅速で組織的な動きに気が付く。契約派は1638年9月20日以前には総会への代表選挙を行わないと、ハミルトン侯に約束する。それはだれが選ばれるべきかが論争点であったからである。けれどもテーブルズは手続きや被選挙権者について9月初頭に、各地のプレスビテリに指令を送っており、20日には選挙を待つばかりとなっていた。またウィムズ伯が本拠地のウィムズ教区でなく、スターリングプレスビテリのリンド教区の長老として選出されている事実の中に、綿密に連絡を取り合い最善の政治的選択をしている傍証を見ることができる。こうした組織性や統制は、戦争の危機を背景にグラスゴー教会総会を契機に一層強化され、州レベルの戦争準備が進んでいった。一方契約を署名していない平信徒に警戒の目が注がれ、署名拒否のマイケルスンとラーマンスは解職された。いまや王の決めたことでなく、人々が集まって決めたことが実行に移されていた。保守的なマイケルスンはこうした事態の革命性を見抜き糾弾した。この同時代人の直観は的中し、彼がバーンタイランド周辺で見聞きしたことがブリテン全土に広がった時､王は処刑されたのであった。

註

(1) National Archive of Scotland, B9/12/7/33-34 以後手稿史料の出典は、National Archive of Scotland 以外に所蔵される場合は、所蔵文書館名と史料番号を文中に示す。したがって、史料番号のみの表記はその文献が National Archive of Scotland に存在することを示す。

(2) David Stevenson, *The Scottish Revolution*, 1637-44, The Triumph of the Covenanters, [以下 *Revolution* と略]David & Charles, Newton Abbot, 1973, pp.102-104. なお本稿では、印刷文献の場合、初出の際註において書誌情報を明らかにし、二回目以降は省略した書名とともに参照ページを文中にて示す。

(3) Allan I. Macinnes, *Charles I and the Making of the Covenanting Movement, 1625- 1641*, [以下 *Charles I* と略] John Donald Publishers: Edinburgh, 1991, p.185

(4) D. H. Fleming, "Scotland's Supplication and Complaint against the Book of Common Prayer (Otherwise Laud's Liturgy), The Book of Canons, and the Prelates, 18 October 1637", [以下 Supplication と略] in *Proceedings of the Society of the Antiquaries of Scotland*, Vol.60 (1925-26) pp.314-83, Edinburgh, 1927, p.375

(5) David Beveridge, ed., *Culross and Tulliallan or Perthshire on Forth its History and Antiquities with Elucidations of Scottish Life and Character from the Burgh and Kirk-Session Records of that District*, 2vols., [以下 *Culross and Tulliallan* と略], William Blackwood and Sons, Edinburgh and London, 1885, Vol.1, pp.172-173.

(6) *Extracts from the Records of the Royal Burgh of Stirling A.D.1295-1666, With Appendix, A.D. 1295-1666*, [以下 *Stirling Extracts* と略] The Glasgow Stirling shire and Sons of the Rock Society, Glasgow, 1887, pp.181-182

(7) http://www.british-history.ac.uk/report.aspx?compid=60083

(8) http://www.british-history.ac.uk/report.aspx?compid=60083#s23

(9) D.Laing, ed., R.Baillie, *Letters and Journals of Robert Baillie, 1637-62*, [以下 *Letters* と略] 3vols, Bannatyne Club, Edinburgh, 1841-42, Vol.1, p.137.

(10) David Masson, ed., *The Register of the Privy Council of Scotland, 2nd series* (1625 -60), 8 vols, 1899-1908, Vol. 7 [以下 *RPCS*, 2-7 と略],pp.89-94.

(11) *Historical Collections: 1638 (2 of 5)', Historical Collections of Private Passages of State*, Vol. 2: 1629-38, 1721, pp. 745-804.

(12) Hew Scott, ed.,*Fasti Ecclesiae Scoticanae:The Succession of Ministers in the Parish Churches of Scotland from the Reformation, A.D. to the Present Time*, William Paterson, Edinburgh, John Russell Smith, London, Vol.2, Part 2, p.545.

(13) Mark Charles Fisset, *The Bishops' War: Charles's Campaigns against Scotland*, Cambridge University Press, Cambridge, 1994, pp.22,33-39.